

序章 本書の目的と構成

第一節 平安期東北史研究の現状と課題

三

第二節 本書の構成

七

第一章 平安前期東北史研究の再検討

—「鎮守府・秋田城体制」説批判—

三

はじめに

三

第一節 研究史の整理と問題の所在

一四

第二節 『延喜式』の記事をどう読むか

一八

第三節 「鎮守府・秋田城体制」は存在したか
おわりに

二七

第二章 磐井郡の成立

—平安初期陸奥北部の境界領域—

四

はじめに

四

第一節 「胆沢三郡」説の検討

四

1. 「胆沢三郡」説の実証性

四二

2. 磐井・胆沢・江刺郡の郷名

四六

第二節 磐井郡の成立時期とその性格

五二

1. 栗原郡と磐井郡域

五二

2. 磐基駅と磐井郡磐本郷 六一

3. 奈良～平安初期の磐井郡域 六二

おわりに.....

六四

第三章 九世紀陸奥国の蝦夷・俘囚支配

—北部四郡の廃絶までを中心にして—

はじめに.....

七三

第一節 「三十八年戦争」後半期のエミシ政策

1. 懐柔策の強化とその目的 七四
2. 「三十八年戦争」後半期におけるエミシ移配の意義 七八

第二節 「三十八年戦争」終結後のエミシ支配

1. 徳丹城の廃絶と九世紀前半頃の陸奥北部支配 八六
2. 承和・斎衡の騒乱の再検討 九〇

おわりに.....

一〇三

第四章 九世紀の「奥地」と元慶の乱

はじめに.....

一一三

第一節 元慶の乱における「奥地」

1. 「奥地」に関する先行研究の検討 一二四

2. 陸奥の「奥地」と元慶の乱 一二五

一三一

第二節 陸奥「奥地」と陸奥北部四郡

1. 陸奥「奥地」の北限・南限について

2. 元慶の乱と北部四郡域

おわりに

附論一 「奥地」と元慶の乱に関する覚書

はじめに

第一節 小野春風・坂上好蔭の行動について

第二節 古代史料にみえる「奥地」について

おわりに

第五章 古代末期の東北支配と軍事力編成

—国衙軍制成立史の一断面—

はじめに

第一節 天暦期の転換——十世紀半ばにおける東北支配の変容

1. 九世紀後葉～十世紀前半の東北情勢

2. 十世紀後半の変容

第二節 九・十世紀軍制史研究の再検討と東北——動員力の問題を中心に

1. 研究史の検討と「諸国兵士」について

2. 辺境軍事貴族の登用と「軍事官僚」の衰退

第三節 十世紀の東北史——支配の拡大とその変質——

一七五

- 研究史の検討と十世紀前半までの東北支配

一七八

- 十世紀後半の東北支配

一七八

おわりに

一八三

第六章 藤原実方の陸奥守補任

——十世紀末の小一条家に関する一考察——

一九一

はじめに

一九二

第一節 陸奥守補任をめぐる従来の解釈について

一九三

第二節 実方の経歴

一九六

第三節 小一条家と陸奥国

二〇一

おわりに

二〇六

第七章 平安中後期の陸奥北部支配と安倍氏

二五

はじめに

二五

第一節 平安中後期の陸奥国内有力者

二七

- 除目関連史料からの検討

二三三

- 朝集使と相撲人からの検討

二三七

- 陸奥国内のアベ氏について

二三七

第二節 安倍氏の政治的性質

二三三

1. 安倍氏の位階について 二三二

2. 蝦夷爵と饗給の廃止 二三六

3. 社会関係の再編と混血の進行 二三八

第三節 安倍氏の台頭過程

1. 安倍氏の中央官人末裔説について 二四一

2. 地方氏族の中世的転成について——付 奥州藤原氏と坂上氏の関係—— 二四五

3. 鎮守府將軍の不在化と安倍氏の台頭 二五〇

おわりに 二五五

附論二 仁和三年以後の東北官人補任

はじめに 二六九

第一節 陸奥守——付 陸奥臨時交易御馬との対応—— 二七〇

第二節 鎮守府將軍・出羽城介 二八六

おわりに 二九〇

附論三 歌枕の用例分析からみる平安期東北支配の推移

はじめに 二九五

第一節 東北関連の歌枕の出現時期とその背景 二九六

第二節 十～十二世紀における歌枕の用例数増減とその背景 二九八

おわりに 二九九

終章 古代中世移行期の東北支配

—付 清原氏に関する試論—

あとがき

引

索